

十島村（トカラ列島）について

一、十島村（トカラ列島）の位置

十島村（トカラ列島）は、鹿児島県本土から南南西方向へと延びる南西諸島に位置しており、熊毛諸島の屋久島と奄美大島との間に挟まれています。

トカラ列島は北から南へ、口之島・臥蛇島・小臥蛇島・中之島・平島・諏訪之瀬島・悪石島・小島・小宝島・宝島・上ノ根島・横当島の順に並んでいます。このうち、臥蛇島・小臥蛇島・小島・上ノ根島・横当島の5島は無人島です。

最北部の口之島は北緯約30度線上に位置し、最南部の横当島付近は北緯29度で、南北に約160kmの長い村です。

二、十島村（トカラ列島）の地質（成り立ち）

トカラ列島の島々は、北の口之島から南の横当島まで、北北東↘南南西方向へほぼ一直線状に延びていますが、細かくみると西側の臥蛇島・小臥蛇島・平島・小宝島・宝島の島列と東側の口之島・中之島・諏訪之瀬島・悪石島の島列の二つの並びに区分できます。

西側の列は古い時代の火山岩類と隆起石灰岩からできた島で、東側の列は新しい時代の火山岩類からできた島です。

島々の多くは、霧島火山帯に属し、地形は比較的に山が高く、中之島の御岳（979m）及び諏訪之瀬島の御岳（799m）は、現在でも火山活動が続いています。

小宝島・宝島は、隆起石灰岩の島であり、山が低く比較的平坦地も多いです。また、黒潮の影響を強く受けていることから珊瑚礁が発達しています。

口之島から悪石島までの島々は、火山特有の地形であって周囲は断崖に覆われ起伏が激しく平坦地は多くありません。しかし、火山の恵みとも言える温泉がほとんどの島に湧出しており、それぞれ利用され、島の人々の憩いの場となっています。

トカラ列島の西側に位置する臥蛇島・小臥島・平島・小宝島・宝島の島列は、基盤をつくる岩石は古期火山岩類です。このうち臥蛇島・平島は、鹿児島県本土の火山岩類の延長方向にあることや地形的な特長および変質の程度から、新生代新第三紀鮮新世（約2百万年以前）の火山活動でつくられたと推定され、小蛇臥島も同時代の火山活動によるものと考えられています。

これに対して、宝島と小宝島の火山岩類は、すべて変質して緑色を帯び、いわゆるプロピライト（変朽安山岩）となっています。同様の特長をもつ火山岩類は鹿児島県本土では、大口・串木野・野間岳付近に広く分布しており、各所で金銀鉱床をつくっています。これらの火山岩類の時代は新第三紀中新世中期（約一千万年前）であり、宝島・小宝島の火山岩類も同時代の火山活動による噴出物と考えられています。

口之島、中之島、諏訪之瀬島・悪石島・上根島、横当島の島列は新期火山岩類からつくられた島です。これらのうち、口之島はいつ頃形成されたかは不明です。中之島は更新世期頃形成されたと思われる、もっとも古い岩石で約百七十五万年前のものが見つかっています。諏訪之瀬島についてはいつ頃形成されたかは不明で、第四紀中期（数万年前）と考えられています。悪石島についても、いつ頃形成されたかは不明ですが、更新世前期頃と考えられています。これらの島々は、最近まで激しい火山活動があったことがわかります。

三、十島村（トカラ列島）の歴史

トカラ列島の歴史については、列島の位置から見て、古代の南洋文化（琉球文化）が北上した「海上の道」に当たります。しかし、九州本土にも近いことから、本土の文化（大和文化）の影響を強く受けた地域でもあります。考古学的にも注目される地域であり、数多くの遺跡の発掘調査が実施され、貿易陶磁器等の出土によって南九州と南島（奄美以南）との文化交流に大きな関わりや影響があったことが解明されつつあります。

中世については、資料が少ない状況ですが、確かに七つの島にも中世的歴史は存在しています。トカラ列島を俄然歴史上に登場させたのは、平家との関係であり、平家一門の日宋貿易・南海貿易による海上交通は、南西諸島のトカラ列島の各島々を標識にして行なわれていたと言われています。

壇ノ浦の合戦で源義経軍に敗北した平家一門は、西走し九州各地に上陸しました。その一部がトカラ列島の各島々に上陸したと言われており、北風に乗ってやってくる源氏の追っ手を見張った番所跡や洞窟があります。そのため、全島ほとんどに平家末裔の伝承が残り、各島に島司（郡司）の家柄が残っています。この家柄は島の中心的・指導的家柄であり、財力・権力も安定し、宗教的役割についても重要な地位にありました。

近世でトカラ列島の島々は、薩摩藩直轄領で船奉行の支配下にありました。各島々には島役（郡司・横目・浦役・名頭）を配置し、口之島・中之島・宝島には在番を置いて島政が行われていました。

幕末においては、口之島・中之島・宝島に異国船番所・津口番所が置かれていました。文政七年（一八二四）、宝島でイギリス捕鯨船との争いがあり、この事件は、日本を変える重大事件となりました。それは、ペリーの黒船出現より三十年早い事件で、これを機に幕府は異国船打払令を出しました。この争いがあつた一体は、イギリス坂と呼ばれています。

昭和21年2月に、連合国軍総司令部の宣言により、北緯30度以南の下七島（現十島村）と上三島（現三島村）に分断され、米国軍政下に置かれることになりました。このことは、日本政府が政治上・行政上の権力行使を停止され、日本の範囲から除外されたことを意味します。昭和27年2月4日に、ポツダム政令（日本政府令13号）により、北緯29度〜北緯30度の下七島を大島郡十島村（としまむら）とし、同年、2月10日に地方自治法の適用を受けることとなりました。

十島村の本土復帰と共に、島々の生活や経済・産業は、県本土へと向きを変え、県本土との関わりは、益々緊密の度合を増していったことから、昭和31年4月1日から役場庁舎を鹿児島市へ移転しました。

四、十島村（トカラ列島）の民俗・名所

トカラ列島海域は潮の流れが速く、また附近の潮流の変化も激しく、昔から七島灘（しちとうなだ）と言われた航海の難所です。生物学的には亜熱帯と温帯を隔てる渡瀬ラインが悪石島と小宝島の間を通っています。民俗学的にも大和（本土）文化と琉球（奄美・沖縄）文化が交差している地域です。

悪石島の鹿児島県無形文化財に指定されている「仮面神ボゼ」は、旧暦の七月十六日に出現する来訪神です。ボゼは、盆行事の最終日に踊りの輪の中に飛び込み盆行事の幕引きをします。神の世界のボゼは線香臭くさく死霊くさい人々の心を太陽の輝く日常の力強い世界へ引き戻し、

転換させる役目をしていると言われます。このボゼについては、昔はトカラ列島の他島でも出現していたようですが、現在では悪石島だけで見ることができません。

石灰岩質の宝島にはたくさん鍾乳洞があり、中でも観音洞と呼ばれる鍾乳洞が最も大きく、かつて「トカラ神道」と呼ばれた島内最大の拝所でもあります。洞内からは古代の湖州鏡や古銭が発見されています。

五、トカラの名の由来

トカラの名は、「日本書記」に出てくるのが最初の所見のようですが、その名の由来については、沖縄・奄美地方で沖の海原を意味する「トハラ」から派生したという説。宝島に乳房の形をした女神山があることから、アイヌ語の乳房を意味する「トカプ」に由来するという説。また、「宝島」の「タカラ」から派生し、列島全体を指すようになったという説などさまざまですが、決め手になるものはありません。